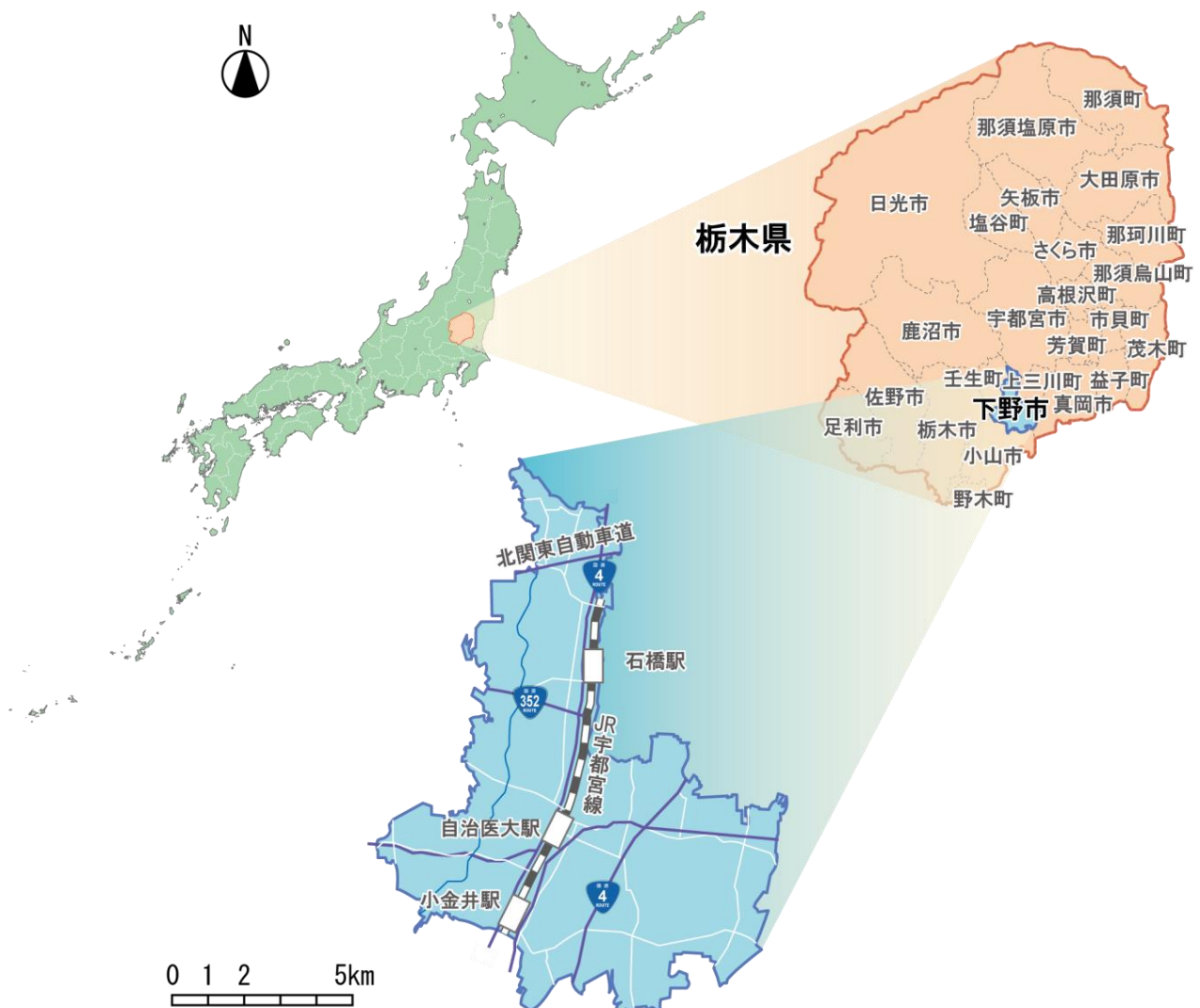


第1章 歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

本市は、関東平野の北部、栃木県の中南部に位置し、都心から約 85km 圏にあり首都圏の一端を構成している。北は県都宇都宮市、南は小山市、東は真岡市(旧二宮町)と上三川町、西は栃木市と壬生町に接し、市域は南北約 15.2km、東西約 11.5km、面積は 74.59 km² で、県内最小面積の市である。



下野市の位置と地図

(2) 地形・地質・水系・水利

1) 地形

栃木県中央部の低地は、南へ緩やかに傾斜し、南部は関東平野の北縁に連なっている。本市全域の地形をみても南へ緩やかに傾斜している。

本市は、西に新川、姿川、東に田川、江川、江川が合流する鬼怒川が南流しており、その河川に沿って谷底平野や氾濫平野が、その低地の縁に沿って自然堤防や段丘などの台地が形成されている。

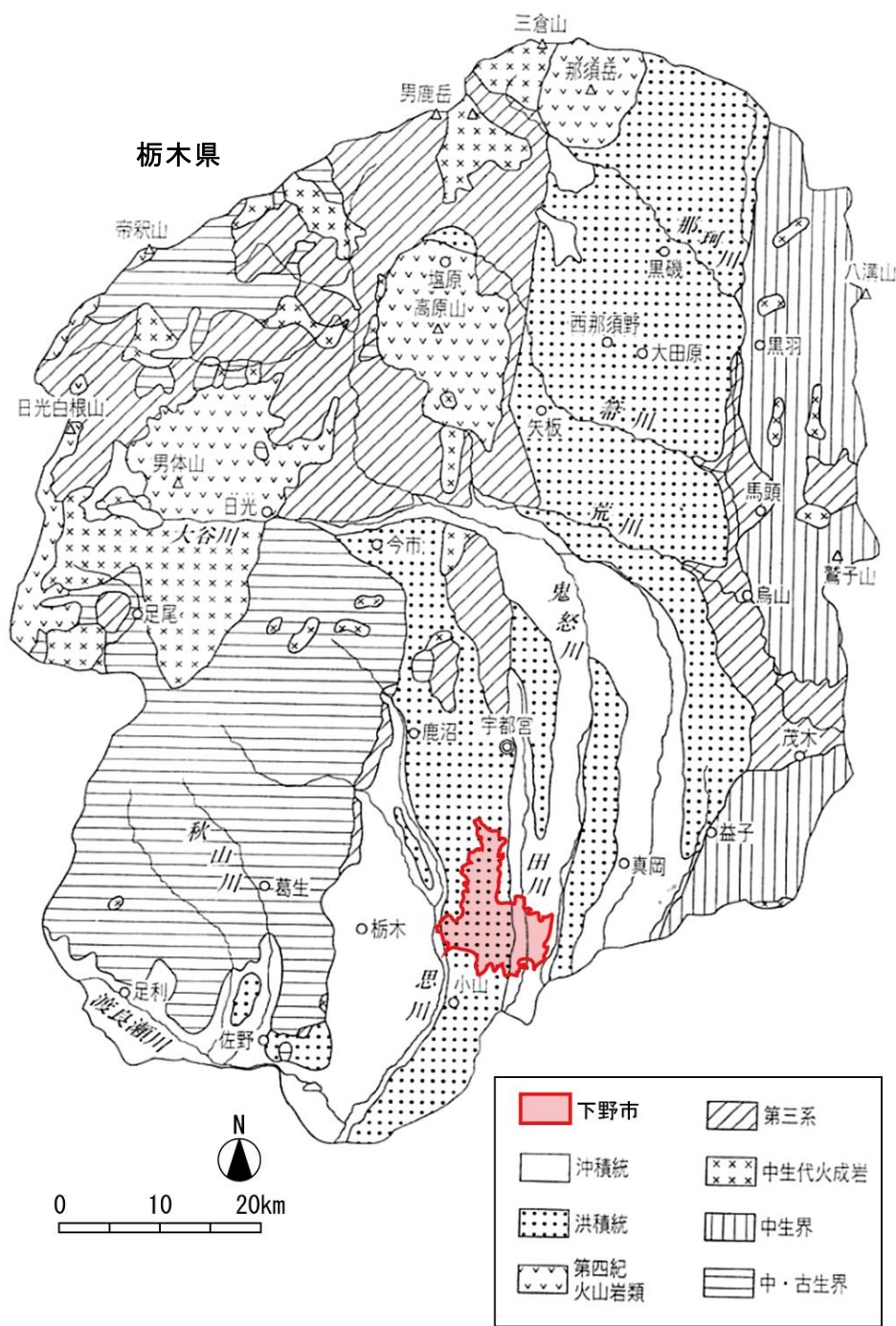


下野市の地形

2) 地質

栃木県にみられる主な地層は、古・中生代の^{たいせきがん}堆積岩や^{かせいがん}火成岩と新生代第三紀の火山活動に伴う凝灰岩類（宇都宮市の大谷石など）、その後の第四紀に河川や海の堆積作用によって形成された^{されき}砂礫層、それに降下火山灰からなる関東ローム層である。

本市には、台地上に第四紀の更新世に形成された洪積層がみられるほか、河川沿いの低地には、河川の働きにより^{たいせき}堆積した土砂層である^{ちゅうせき}沖積層が広がっている。



栃木県の地質

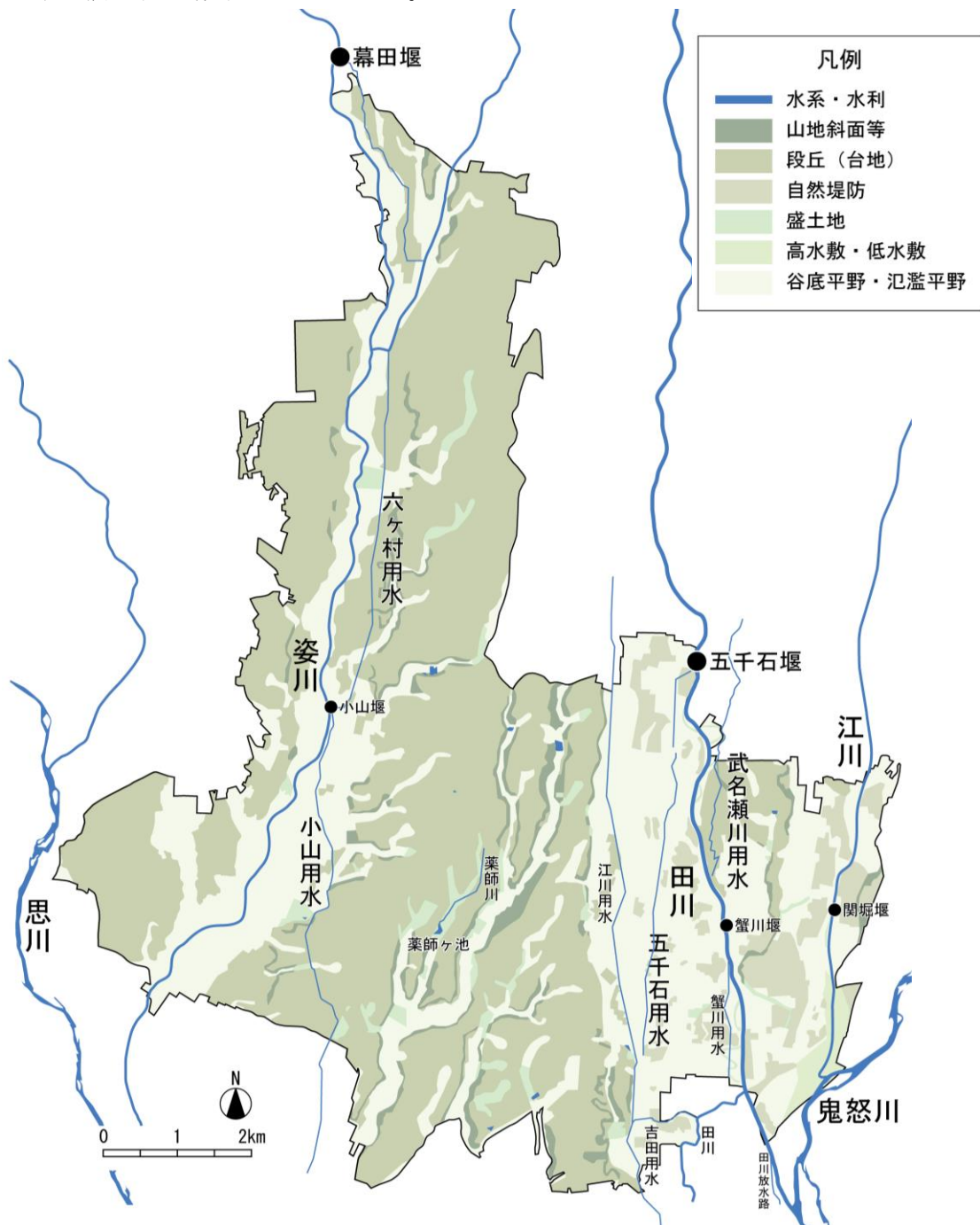
< 下野地理学会編『日曜の地学（9）栃木の地質をめぐって』築地書館，1979 > に下野市の位置を記載

3) 水系・水利

本市には、東に日光連山を源流とする田川・江川・鬼怒川、西に足尾山地を源流とするおもいがわ思川と宇都宮市のくらかけ鞍掛山を源流とする姿川などの河川が南流している。これらの河川を下ると利根川水系となる。

古代から、サケ・コイ・フナ・ウナギ・ナマズ・ウグイ・オイカワなどのぎよろう漁撈の場として利用されている。また、姿川には、江戸時代の通船の記録もあり、水運としても利用されていた。

江戸時代以降、これらの河川には農業用水や堰せきが設けられた。鬼怒川、田川にごせんごく五千石用水、むなせ武名瀬川用水など 10 以上の用水と 8 か所の取水堰が設けられた。姿川には、旧石橋町地内にろっか六ヶ村用水など 8 つの用水、旧国分寺町地内には小山用水などが設けられた。その他、薬師ヶ池・薬師川は、大雨時の排水路や調整池の機能を持っている。

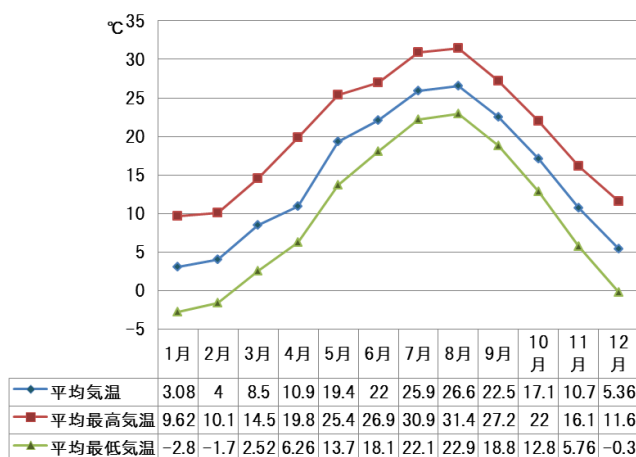


下野市の水系・水利

(3) 気象

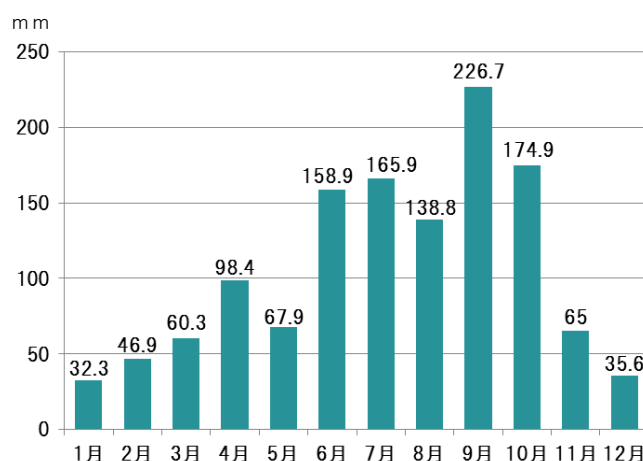
本市の年平均気温は約14℃、年平均降水量は約1,300mm（隣接する小山市のデータ）であり、夏は高温多湿、冬は低温乾燥のやや内陸性を帯びた温暖な気候で、積雪はほとんどなく、台風などの被害も比較的少ない地域である。

夏季は、気温の上昇により積乱雲が発達して雷が多く発生する。8月から9月にかけて降水量が多く、湿度が高いことが特徴である。冬季は、海から離れているため日中と夜間の気温差が大きく、北西から季節風が吹くため、平地でも氷点下になる日が多い。また、冬季は日照時間が長いという特徴もある。



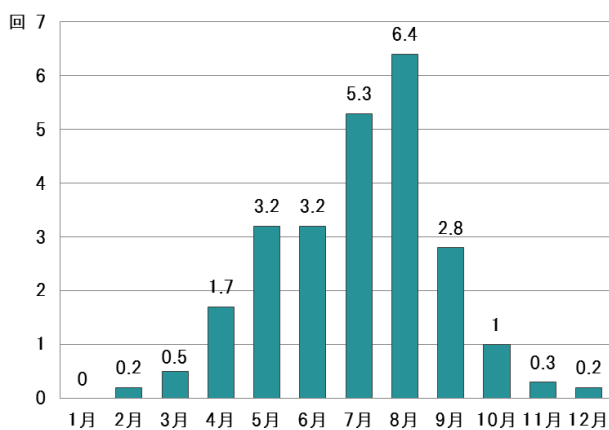
月別平均気温・最高気温・最低気温

< 気象庁「小山市 2013～2017 月別気温」 >



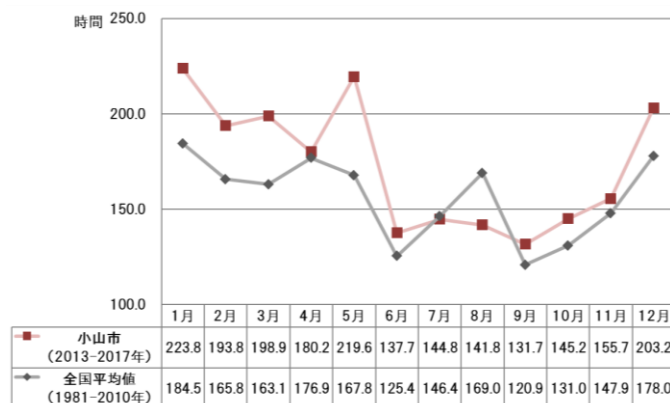
月別平均降水量

< 気象庁「小山市 2013～2017 月別降水量」 >



昭和56年～平成22年における宇都宮市の雷日数の平均値

< 気象庁 >



日照時間

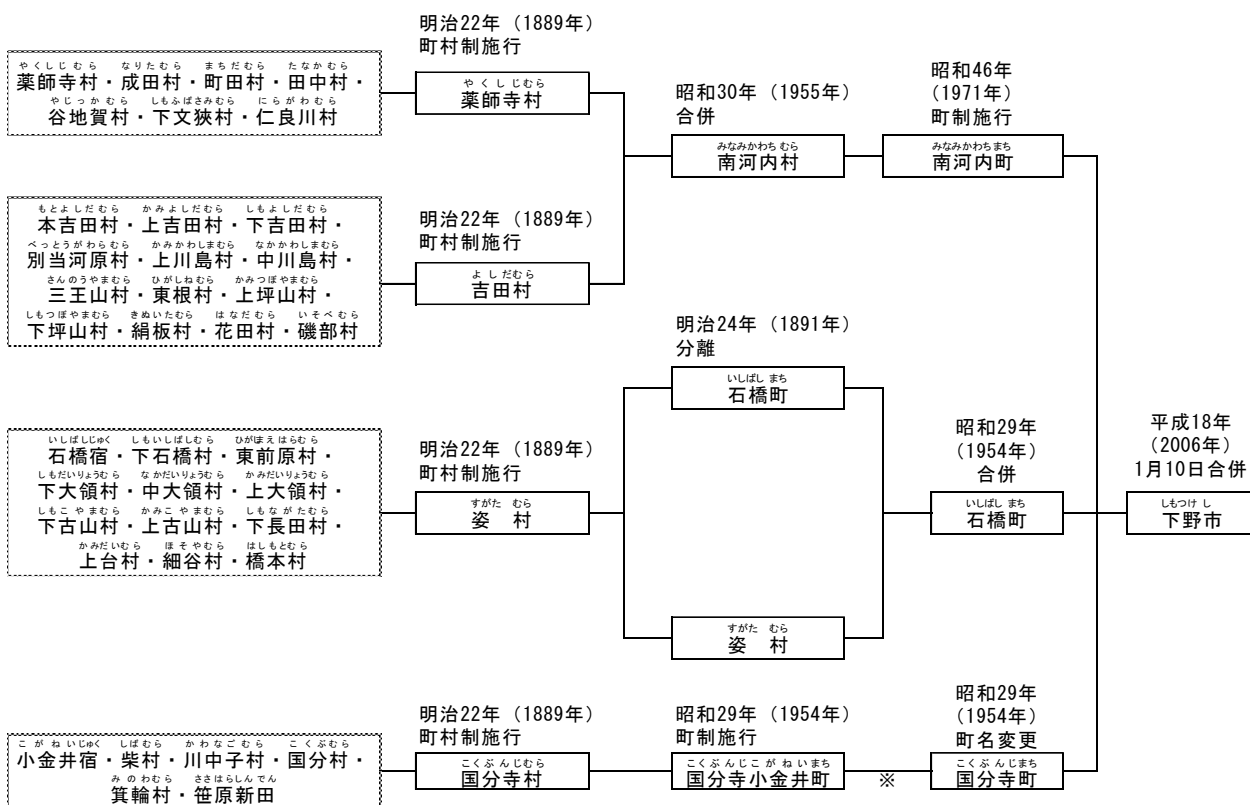
< 気象庁「小山市 2013～2017 月別日照時間」 >

2. 社会的環境

(1) 市の沿革

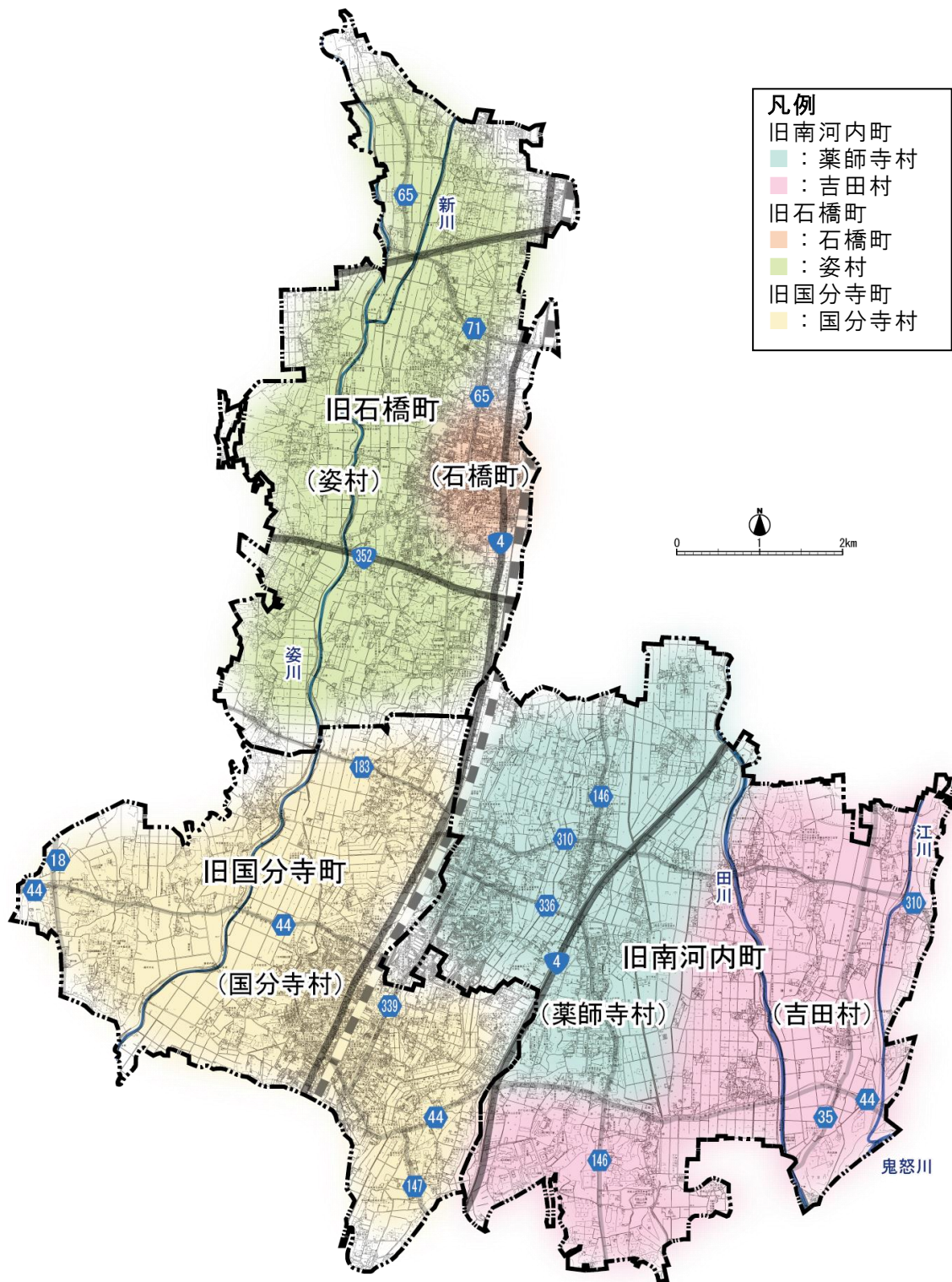
明治4年(1871)7月の^{はいはん ち けん}廃藩置県後、明治22年(1889)4月に市町村制の施行に伴い^{やくし じ むら}薬師寺村・^{よしだ むら}吉田村・^{すがたむら}姿村・^{こくぶん じ むら}国分寺村の4村が誕生した。

その後、^{やくし じ むら}薬師寺村と^{よしだ むら}吉田村が合併し^{みなみかわ ち まち}南河内町に、^{すがたむら}姿村が^{よしぼしまち}石橋町に分離後合併し石橋町に、^{こくぶん じ まち}国分寺村が国分寺町となり、平成18年(2006)1月に、南河内町・石橋町・国分寺町が合併して下野市が誕生した。市の名称は、3つの国指定の史跡、下野薬師寺跡、下野国分寺跡、下野国分尼寺跡があり、古代下野国(栃木県)の中心地であったことから、公募で票数が最も多かった下野市に決定した。



※昭和29年(1954)町制施行により「国分寺小金井町」となるが、同年、住民投票により町名が「国分寺町」になる。

下野市の沿革



旧3町の範囲

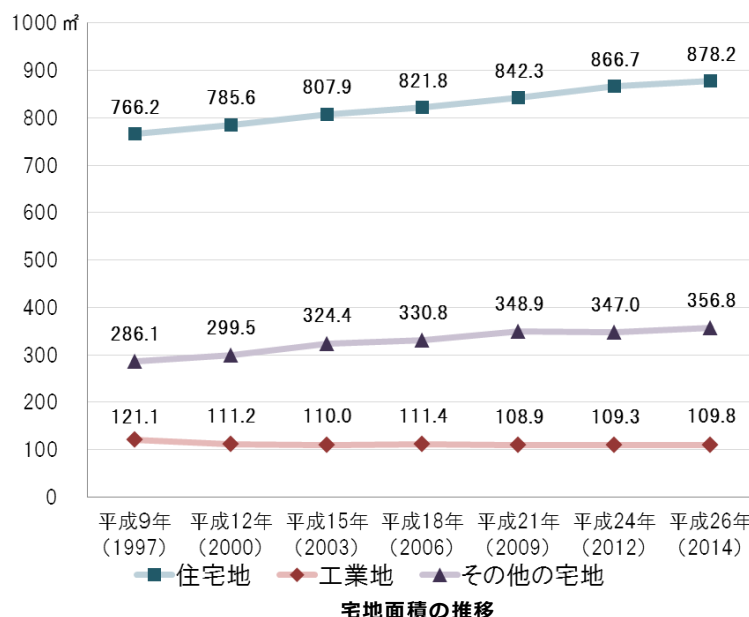
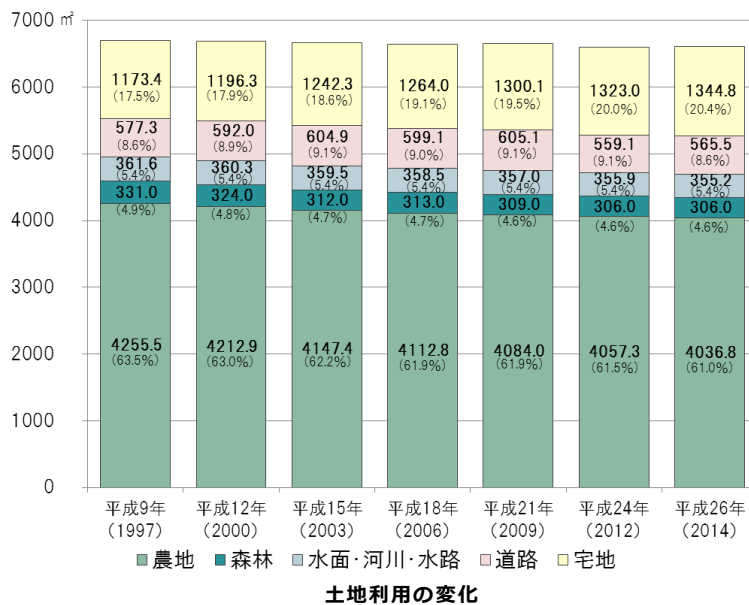
(2) 土地利用

本市の東部には鬼怒川と田川、西部には思川と姿川が南流しており、その周辺には田園環境が広がっている。河川に接する低地は水田として利用され、低地と対になる台地には根菜類などの商品作物のほか、生産開始から300年の歴史を持つ干瓢^{かんびょう}の原料となる夕顔畑^{ゆうがお}が広がっている。夕顔の作付けにおいて、堆肥の原料となる落ち葉の供給元である平地林^{へいちりん}が不可欠であり、現在も畑地の周辺には、クヌギ・クリなどの落葉広葉樹を主とする平地林が広がっている。平地林は、古墳や中世城跡を起源にしていることが多い。

第二次国土利用計画下野市計画における平成26年(2014)時点の土地利用の状況は、農地が61.0%、森林が4.6%、水面・河川・水路が5.4%、道路が8.6%、宅地が20.4%となっている。

市全域の74.59 km²が都市計画区域で、市街化区域が9.82 km²、市街化調整区域が64.77 km²である。土地利用の半分以上が農地で占められており、宅地は石橋駅・自治医大駅・小金井駅周辺の市街地と、古来より宅地として利用されている河川に近い台地の端部に集中している。

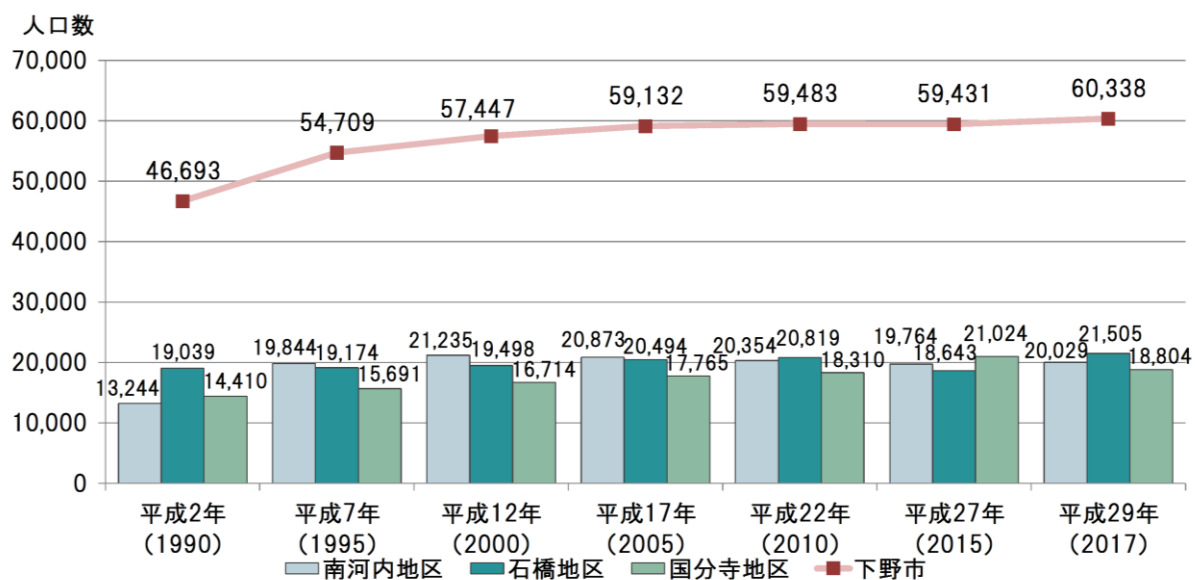
土地利用を平成18年(2006)の合併時と現状で比較すると、農地や森林などが微減し、宅地などの都市的な利用が増加している様子がみられる。



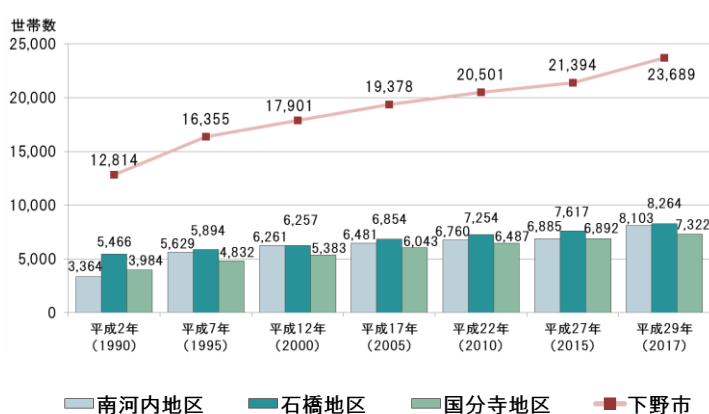
(3) 人口動態

本市の総人口は、平成29年(2017)時点で60,338人、世帯数は23,689世帯である。平成2年(1990)以降は人口が急増し、平成22年(2010)まではゆるやかな増加傾向にあったが、平成22年(2010)に人口減少に転じ、その後は減少が進行すると推測されたものの平成27年(2015)から平成29年(2017)にかけて微増している。国立社会保障・人口問題研究所の推計値によると、令和22年(2040)時点で51,287人と推計されており、今後は、人口減少が進行していくことが予想されている。なお、世帯数は増加し続けている。

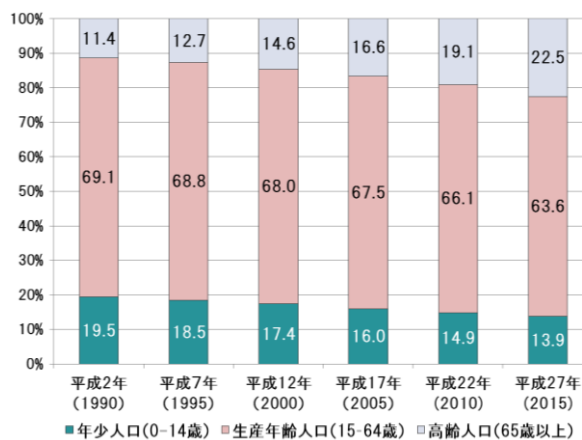
年齢3区分別人口をみると、平成27年(2015)時点で、年少人口(0-14歳)が8,206人(13.9%)、生産年齢人口(15-64歳)が37,656人(63.6%)、老年人口(65歳以上)が13,329人(22.5%)となっている。今後は、老年人口の増加、生産年齢人口の減少が予想されており、少子高齢化が進むと考えられている。



下野市の人口数の推移



下野市の世帯数の推移



年齢3区分人口の推移 (割合)

(4) 交通機関

本市には、国道4号、新4号国道、JR宇都宮線^{うつのみやせん}など首都圏を結ぶ大動脈が南北に通っている。自治医大駅から東北自動車道栃木インターチェンジまで約30分で移動することが可能である。近年は、北関東自動車道が開通し、2つのインターチェンジ^{みぶ うつのみやかみのかわ}（壬生、宇都宮上三川）が供用開始されたことにより、交通の利便性が増している。

また、本市はJR宇都宮線に小金井駅・自治医大駅・石橋駅の3駅を有し、都心まで快速で約70分の通勤圏にあり、小山から新幹線利用で約40分の距離にある。小金井駅は、始発、終着駅として首都圏への通勤・通学の利便性に特に優れている。近年は、JR宇都宮線と横須賀線を直通運転する湘南新宿ラインや、東海道線と直通運転する上野東京ラインが開通したことにより、交通の利便性はますます高くなっている。



下野市の交通

(5) 産業

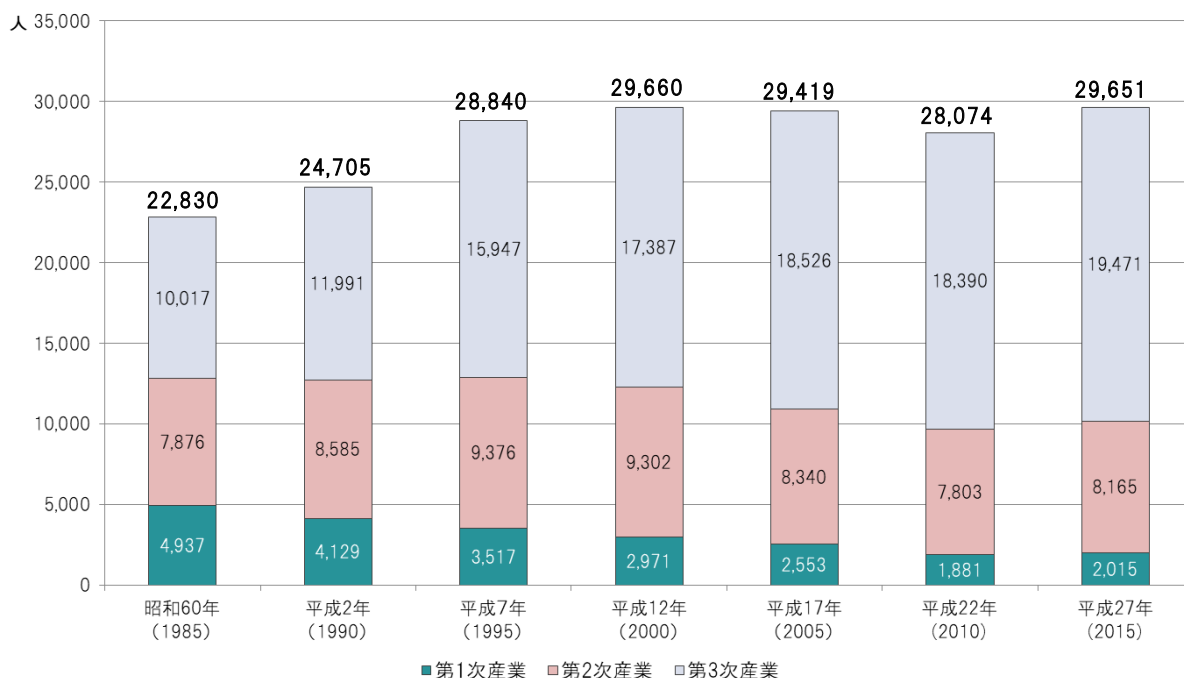
本市の主要産業は農業、製造業、商業であり、とくに合併以来、生産量日本一を誇る干瓢をはじめとする都市近郊農業、食料品などの製造業により発展してきた。

農業では、立地条件を生かした都市近郊農業により、露地野菜、施設園芸を営むとともに、畜産業との複合経営も実施している。

製造業では、首都に近く幹線道路、鉄道などの交通条件に恵まれていることを活かし、輸送用機械器具製造業、食料品、プラスチック製品、金属製品などの工場がある。近年は物流拠点としての発展にも期待されている。

商業における小売店舗数・小売従業者数は、減少傾向にある。小売店舗数の減少が市街地・商店街での空き店舗の増加を招き、活気が失われる原因となっている。

産業別就業人口をみると、平成12年（2000）以降は減少傾向にあったが、平成22年（2010）以降はどの産業も増加している。



下野市の産業別就業人口の推移

1) 農業

本市の農業は、首都圏にある有利な立地条件を活かした都市近郊農業により、米麦を中心にホウレンソウ、タマネギなどの露地野菜から、キュウリ、トマト、イチゴなどの施設園芸まで、農作物の種類は多岐である。

また、肥育牛との複合経営も盛んである。なかでも干瓢の生産量は合併以来全国一を誇っており、外国産の輸入品が多く流通している現在においても国産の約5割が本市で生産されている。

近年では6次産業化*に取り組む農家も見られるなど、新たな動きもある。本市では、平成29年（2017）5月に石橋南部地区ほ場整備事業により確保された非農用地約1.1haに、都市部住民と農村部住民の交流を通し、地域の活性化、地域農業の振興及び6次産業化を推進する拠点として、下野市石橋地区都市農村交流施設「ゆうがおパーク」を開所した。

ゆうがおパークでは、直売所において地元産の安全安心な野菜をはじめ、これらを使った惣菜、漬物、味噌などの加工品の販売、軽食コーナーで惣菜弁当、麺類などの提供を行い、地域の6次産業化を推進していく。

※：6次産業化とは、農林漁業者が生産した農林水産物を活用し、新商品の開発、新たな販路の開拓（輸出も含む）等を行う取組みのこと。（農林水産省HPより）



都市農村交流施設 ゆうがおパーク

下野ブランド

本市では、平成24年（2012）11月に『下野ブランド推進プラン』を策定した。「下野」の知名度を向上し、地域経済の発展・人的交流の拡大・地域の活性化、3町合併後の一体感形成を目的としている。現在、干瓢などの一次産品、加工品、工芸品が19品、石橋江戸神輿などの市内産業の製品・技術が2件、下野薬師寺などの文化財など地域資源が11件の計32件が認定されている。

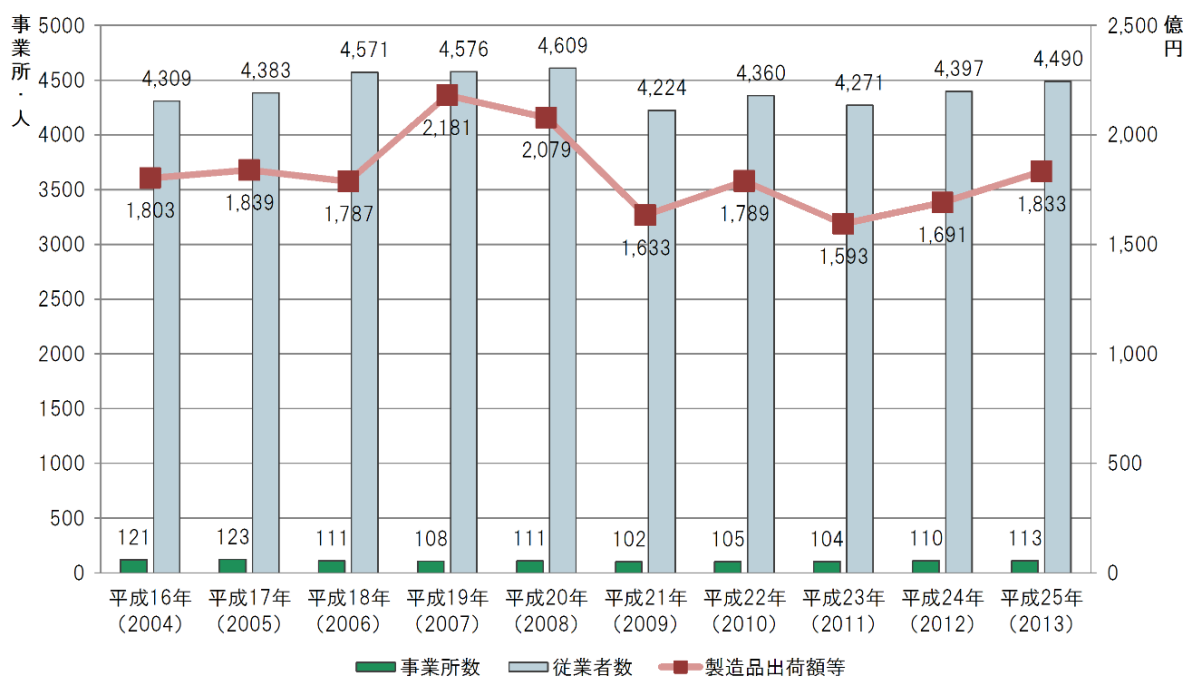


2) 工業

本市の工業は、食料品、プラスチック製品、金属製品、輸送用機械器具製造業などの事業所数、従業者数、製造品出荷額などの割合が大きく、事業所数は少ないが従業者数は多い飲料・たばこ・飼料、パルプ・紙・紙加工品、電気機械器具製造業など多様な業種からなる。

事業所数の推移は横ばいであるが、従業者数、製造品出荷額は、いずれも平成20年(2008)から平成21年(2009)にかけて落ち込み、その後、回復傾向にある。この一時的な落ち込みは、リーマンショックによる世界的な景気後退が大きな要因として考えられる。

幹線道路、鉄道などの交通網に恵まれていることから、今後は物流拠点としての発展が期待されている。



事業所数・従業者数(製造業)・製造品出荷額等の推移
 <下野市『第二次下野市総合計画』, 2016>

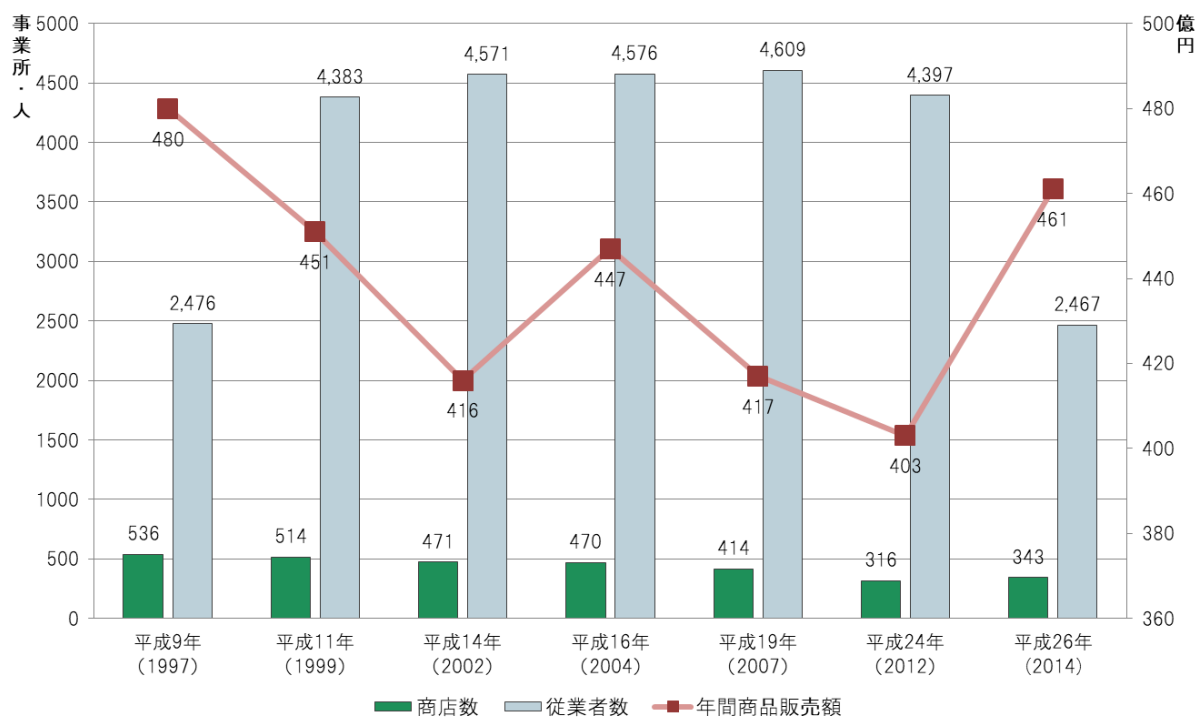
平成24年度 主な市内製造業の業種構成

<下野市『下野市産業振興計画』, 2015>における従業者4人以上の事業所の集計

産業中分類	事業所数	従業者数(人)	製造品出荷額等(億円)
製造業	104	4,271	1,593
食料品製造業	11	872	366
繊維工業	5	78	9
パルプ・紙・紙加工品製造業	6	206	85
プラスチック製品製造業(別掲除く)	15	551	121
窯業・土石製品製造業	6	198	52
金属製品製造業	13	265	46
生産用機械器具製造業	8	176	46
業務用機械器具製造業	4	63	7
電子部品・デバイス・電子回路製造業	5	100	13
輸送用機械器具製造業	14	750	462

3) 商業

本市の小売店舗数の推移はほぼ横ばいであるが、平成24年(2012)以降には従業員数の急激な減少と、小売業年間商品販売額の増加があった。従業員数の減少の要因のひとつは、市内2カ所の大規模工場が閉鎖したことが考えられている。また、販売額の増加の要因のひとつは、県内トップシェアのハウスメーカーで本市にも支社を有する企業の売上が増加したことが考えられている。



小売店舗数・従業者数・年間商品販売額の推移

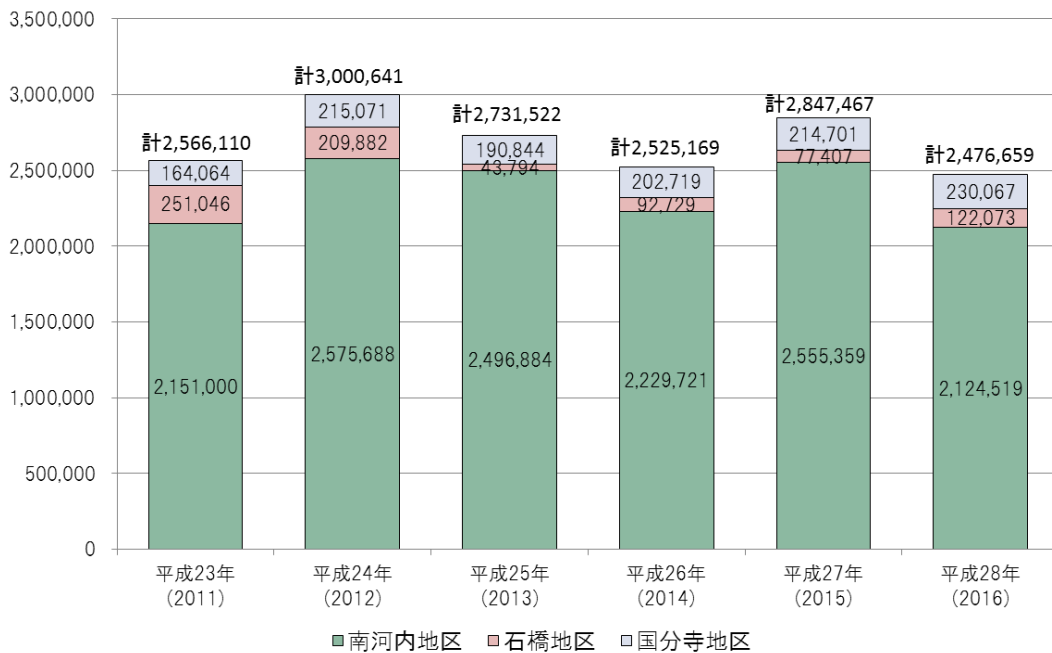
(6) 観光

本市の観光入込客数※は、約 248 万人（2016）で、対前年度比 13%の減少がみられる。また、観光入込客数の多くは、南河内地区が占めている。これは、平成 23 年（2011）にオープンした道の駅しもつけへの来訪者が中心で、年間 200 万人を超える人々が訪れている。

天平の丘公園は、日本三大桜（根尾谷淡墨桜、三春滝桜、山高神代桜）の子孫樹のほか、八重桜、山桜、枝垂桜など、様々な種類の桜約 470 本を觀賞できる観光スポットとなっている。天平の花まつり期間中は、地元商工会加盟店舗の出店やステージショーの開催、ロードトレインが運行されるなど、子どもから大人まで楽しむことができ、県内外から約 20 万人が訪れるイベントとなっている。

下野薬師寺跡では、史跡地に咲く梅の花が見ごろになる 3 月上旬に下野薬師寺跡史跡まつりが開催され、毎年約 2 千人が訪れる。

※：観光入込客とは、日常生活圏以外の場所へ旅行し、そこでの滞在が報酬を得ることを目的としない者で、「観光地」や「行事、祭り、イベント」を訪れた者のこと。（平成 28 年栃木県観光客入込数・宿泊数・推定調査結果）



観光客入込数の推移



天平の花まつり（天平の丘公園）



下野薬師寺跡史跡まつり